

## Memories of Professor Fujino

門司, 勝  
福岡女学院短期大学 : 教授

<https://doi.org/10.15017/9822>

---

出版情報 : 中国文学論集. 3, pp.67-71, 1972-05-01. The Chinese Literature Association, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :



# 藤野先生の思い出

門 司 勝

春雨というには冷たすぎる雨が何日も降りつづいて、やっと晴れたが風は冷たかった。昭和二十二年三月下旬のある夕方、勤め帰り、名古屋栄小路の古本屋をのぞいて、雑本三十円均一の台で、「惜別、医学徒の頃の魯迅」を買った。昭和二十年九月朝日新聞発行、黄色の表紙は破れていて、三枚の十円札に未練が残ったが、「これは東北地方の某村に開業している一老医師の手記である」という書き出しと、バラバラめくった頁に何度もある「藤野先生」という名に胸さわぎがした。

郊外の復興住宅の寢床で読み通したが、明治三十七年仙台医学専に入学した東京者の「私」が同期の留学生周樹人（魯迅）と解剖学教授藤野先生にまつわる出来事を語る小説で、太宰作品としては場ちがいの感じがした。「私」も実在人物ではないように思えた。

私は晩年の藤野先生のすぐ近くに住み、暮の相手をしたり脉を取ってもらったりした。また、魯迅の弟周作人を副理事長とする北京の華北綜合調査研究所に勤めていた。どちらも戦後他界された。藤野先生の御夫人は先生より二十くらい若くまだお元

気で、令息ふたりはりつぱになつておられる由、北陸の便りに聞いた。先生は、魯迅の「藤野先生」として世に知られることを極端にきらつておられた。夫人も令息も先生の生前の気持を今も重んじておられるかもしれない。しかし私としては、どうしても書き残しておきたい私の人生記録の一頁である。

北陸の九頭竜川の川口に港町三国がある。古くは五〇七年、繼体天皇はこの地から帝位に迎えられた。中世、織田信長は豪商森田家の協力を求めて朱印状黒印状を与えた。將軍家光時代、竹内藤右衛門らは松前に航行中漂流し奉天、北京、京城を経て帰国した。將軍家治時代、遊女哥川は加賀の千代女と交遊のあつた俳人であつた。

奥底の知れぬ寒さや海の音

哥川

「三国小女郎」物語は、新内、義大夫節、講談、浮世草子、芝居で有名だつた。明治十二年建造の小学校は木造五階の西洋館だつたが今は門だけ残っている。河口防波堤は明治十三年完工、オランダ人の設計建造で、今も日本海の荒波から港を守り、

先端の灯台は沖ゆく船を見守っている。近くに観光地東尋坊があるけれども客はほとんど素通りするので川岸に並ぶ倉の白壁が川波に落す影も静かである。

室生犀屋は明治四十二年わずか二ヶ月だが、日刊三國新聞主筆であった。中野重治は明治三十五年附近の丸岡町で生れた。明治四十年、この町に母とふたり暮しの娘が、福井市から視察に来た県知事の子を生んだ。その子高岡芳雄は長じて高見順となった。詩碑「荒磯」は歌う。「おれが死ぬときもきつと、どんどんとどんどろく波音がおれの誕生のときと同じように、おれの枕もとを訪れてくれるのだ」知事は永井荷風の叔父にあり、枢密院顧問官となった阪本男爵で、同年本妻には外交官詩人阪本越郎が生れている。

町の東方の丘に中学校と女学校があった。私たち親子二代は昭和十年前後十年、中学の英語教師を勤めた。昭和十年の冬の大雪で感冒がはやり私たち夫婦にあづかりの中学生ふたり枕をならべた。全快はしたものの金に困り、家賃十年の「伝兵衛の家」から八円の森田家別荘の土蔵に引越した。

防波堤の南は河口北は入江で、入江の岸は宿（しゆく）と米ヶ脇という漁村である。網元の大きな家や寺格の高い寺があり、遠洋近海漁業や航路の船長が少年の夢であり海女も多かった。

米ヶ脇には三好達治が昭和十九年から四年間住み、東尋坊に詩碑がある。入江に迫る陣ヶ丘の上と下とに森田家別荘があった。上の方は手入れがよかったが、下の方は夏場の海水浴客に貸したりして荒れていた。荒れた下の方の前庭の隅に土蔵があり、軒は傾いているが二階家に改造してあって、そこに引越したの

である。

町の中心にある森田家本邸蔵屋敷には昭和十八年から二十七年にかけて高浜虚子が四回訪れて「愛居」と命名した。俳人伊藤柏翠、森田愛子、そして虚子の三句碑が東尋坊にある。森田愛子のことは多田裕計の短篇小説「三國」に三好達治のことと共に書いてある。

蔵の家から路をへだてた南隣りに新築の二階家があって、門札は「藤野巖九郎」とあった。その奥さんは森田家の大番頭で町会の元老である老人の長女で別荘の管理をしていたから、妻は毎月八円を奥さんに納めた。やせて皮膚の青白い、上品だが潔癖で神経質らしく、よそ者で二十五才の妻はおずおずしていた。四十才前後に見えたが、御主人は六十才すぎに見えた。

すこし猫背でやせて小柄だった。銭湯で一緒になることがあった。七、八十の一升酒で胸焼けした連中が、五、六十代は若僧あつかいする湯ぶねで見る藤野先生の骨格はがっしりしていた。艶や油気のない皮膚はひきしまつて清らかであった。度の強い眼鏡の奥にざらりと光る眼光は鋭く、がっちりしまった口もとから時にのぞく歯が強そうであった。偏屈な変り者の感じであるが、気品と威厳がそなわって一種特異な風格を成していた。

病院は三國と福井の中間にある先生の郷里本庄村にあった。住居には何ひとつ医者であることを示す表示はなかった。和服姿で、大きな風呂敷包みを抱え、朝出て夕方帰る時間は極めて正確であった。医は仁術ゆえに、近所の人たちの急場の診療だけはことわらないが、医者としての生活は病院にかぎられていた。両親によく似た感じの令息がふたりあって、金沢四高理科

と私の勤める中学校に通っていた。令息が学生でなかったら、先生は開業医はなさらないのではないか、そういう感じがあった。

奥さんの里である町会元老の家は森田本家の近くであった。

ある夏の夕方前を通ると、暗い長い土間の奥に本棚が並び、老主人がわきに坐っていた。店先に蔵書を並べるような小さな家ではないし、古本屋を営業しているのかもしれない、ちよつと拝見と中にはいった。どうぞと一言、まことに無愛想である。

驚いた。漱石、鏡花、天外などが並び、手にとつて見ると初版が相当ある。ふところには三円たらずしかない。家にも貯金通帳にもない。胸算用で三冊抜いて値段を聞いた。定価がついていて、さうと横向いたきりで言う。だつて古本でしようと言つたら開きなおつた。その鑑札を見なさい、うちはちやんと書店です、めんど、だから学校に教科書を納めるだけで長い間新本は仕入れないが、そこにあるのは全部新本で仕入れたものです。定価通りしか売りません。教師と鑑定したものと見えて、声も顔もやさしくなつた。ほんとうなら実価は定価の何部もするものがあると聞かれない先と思つて、あわてて定価を払つた。ここは狭いから奥にまだたくさんおいてありますからごらんなさいと言つてくれたが、もう金がないから目の毒と飛びだした。

ある日家賃を持って行つた妻が、奥さんから漱石全集の一冊を借りてきた。思いもかけず、奥さんは青いリボンに海老茶のはかまの文学少女がそのまま四十才になつたような人で、文学の話になると青白い頬に血がさして声もうわずるほどだったという。それを聞いて私は、気むづかしそうな御主人も「我輩は

猫である」の主人のような人であるような気がした。

奥さんと仲良くなつた妻が、ある日、御主人は魯迅の「藤野先生」であることを聞いて帰つた。すぐには信じられなかつたが、だんだん聞いているうちに事実であることがはつきりしてきた。あさましくも私は、それまで敬遠気味であつたのが、何とかして先生に近づかんものとしきりに機をうかがいはじめたのであつた。

魯迅の来日は明治三十五年二十二才の時で、三十七年仙台医専に入学して藤野先生の解剖学の講義ノートに毎週朱筆を入れてもらったという。三十九年結婚、兄弟再来日、四十二年帰国し、四十四年辛亥革命、大正七年「狂人日記」で作家生活に入り、昭和十一年五十六才で上海で死んだ。「藤野先生」は大正十五年北京から廈門に去つてそこで書かれた。

藤野先生の履歴は知らない。私は太宰治の「惜別」に何かを知ることができると思つたが、魯迅の「藤野先生」以外のことにはなかつたやうである。そして知ろ、うとする必要はもう感じない。ただ、私が接した藤野先生の姿を、魯迅の「藤野先生」の姿に重ねて思い出したいだけである。

魯迅は先生が惜別と書いてくださった写真を常に壁にかかげ、うみつかれ心おこたらんとする時、仰ぎ見て勇をふるい起したといつてゐる。ある夜先生不在の時、私たち夫婦は仙台時代の先生の写真幾枚かを奥さんに乞うて見せていただいた。

暗い研究所の大机を前にして藤野先生は立っている。魯迅が黒いと言つてゐる顔はなるほど写真のうつり工合いのせいか黒光りしている。(港町の先生の顔は青白く見え、時にほんのり

血の色が浮んだ。一がっちりした頬骨に大きな八字ひげがピンとはねている。眼鏡の奥の眼は澄んで燃えているようだ。フロックコートに包んだ体格は瘦せているが肩はがっしりしている。一見ただ者ならぬ風格である。

思い出すことがある。先日知友吉原勝氏所蔵の小冊子「鎮西余響」を見せてもらった。明治二十六年、第五高等学校倫理学教授秋月胤永先生古稀記念誌で、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が英文の一文を寄せている。その一節を訳する。「……ここに我等すべての師父あり。その人は倦み疲れることなく、その心底常に喜びをたたえてあり。——我に何ぞ不平不満あらんや、陽気と暖気を我等すべてにもたらすが如し。その暖気たるや必ずしも常に暖かならざる暖灯よりも暖かし。」

西洋渡来の文豪の心を暖かにし、何ぞ我に不平不満あらんやと奮起させている秋月先生的人格は、東洋隣国の文豪の心を暖かにし奮起させた藤野先生と相通ずるものであらう。明治の日本人の中には、異国人のすぐれた精神が接してただちに感得する精神の光を発する人たちがいたのである。それはきたえぬきみがきあげられた精神が、ゆったりとして静かな微笑を通じて発する輝きであつたらう。明治は貧しく、一徹な意志と激しい情熱で目的を追求し生きぬいたが、洋々と広く悠々と静かな東洋の情緒をたたえていたと思う。昭和は富んでがつがつと慾望を追求し、情緒のま、に右往左往あわたしい感じがする。日本が西洋に役立てるものは車やトランジスターなどはかりではないだらう。日本が保存している東洋の心であるだらう。

魯迅の「藤野先生」からはうかがい知れない半面を聞いたこ

とがある。先生は芝居が大好きで仙台に来る千両役者は見逃したことがなかった。美妓を愛したこともあった。何よりも囲碁を愛好し、盤に向っている時はどんな急用でも「こめんこめん」と右手を頭の上で振った。

私は妻を通じて奥さんから、土曜の晩三番以内囲碁のお相手をつとめる許可を得た。村には田舎初段が何人かいたけれども、連中はかけ碁なので先生は打たなかった。私という相手が出来て先生は子供のように喜ばれたらしい。路上でも銭湯でも、私の顔を見つけると、すうっと斜めに寄ってきて、柔和な表情を筋肉は動かさない顔にただよわせ、魯迅のいう「あの抑揚頓挫のある言葉」を低くし、あたりに人がいなくてもあたりを見まわす仕草で、「今晚おひまなら、あのこれをな」と石をつまむ手つきをされるのであった。曜日に頼着はなかった。しかし私は土曜日の晩三番以内の約束を守りつづけた。その方はまるでだらしない私だったが、妻がたえざる注意を怠らなかったので守れた。

私の家の者が病気になるると先生の往診を願えるのは、碁のお相手をする前からだだつたように思う。お宅での診察はなさらないが薬はいただきに行つた。家にあづかっている中学生の診察をお願いした時のことを思い出す。打診ぶりはあんまが腰をもむ風情である。ていねいに検温器をわきにあてがうと、おもむろに私をかえり見てこの前打つた碁話をなさる。検温器を取りだすと、私の妻に向つておっしゃる。

「その電気のはやをもそつとこつちえな。」

目を近づけて、つくづくところんになり、和服の袖をたくし

あげて腕をまつすぐにのばし、検温器の水銀をふり落すのに手首だけを振り動かす。それからそそくさと立ちあがってからおしやる。

「心配することはありませんでな。あとでお薬をさしあげますので、ちよつと取りにきてな。」

そそくさと玄関に出てそとに出来るが、忘れものを思い出したように格子戸から半身だけ入れて私を手招き、石をささむ手つきを見せられる。

「おひまなら、あとでこれを、な。」

碁は、宿直碁七級の私が二目おいていた。はじめ勝てそうな気がして調子にのつて打っていると、結局かならず負けている。それでも二目以上はおかせないのである。何とか勝つてやろうと盲滅法理不尽な手を打ちまくっていると、これは参りましたなとほめてくれ、たまに勝つことがあった。今思うに、実力は格段の差があったのである。先生は、とにもかくにも石を並べる人間である私を相手として前に坐らせ、独り局面を楽しんでおられたのである。

私の目的は本能寺にあり、碁の前後や合間に仙台時代のことや魯迅のことに水を向けた。ところが先生の口にするのは、碁以外は天気ぐらいのもので、自分のことはもちろん他人のことも、人間に関する話は一切なさらなかった。私という人間も碁の相手以外の何者でもないことがはつきり解ってきた。碁なら宿直室で同僚と泥仕合をするのがおもしろい。先生のお相手はだんだん退屈になってきた。

ふところ工合が普通になって、土蔵を出て中学のそばの丘の

上に引越してからは、ぶつたり先生のお宅にうかがわなくなつた。たまに先生にお会いすると、すつと斜めによつてきて、「今晚おひまなら、これをな。」と例の手つきを見せたが、お義理に二、三度うかがつたきりである。先生はさびしかつたであろう。とりかえしのつかぬ親不幸をしたような気持が今もする。昭和十一年十月十九日魯迅は上海で死んだ。当時ジャーナリズムは騒然となった。しかし英語教師の私は、ジャーナリズムの動きには関心がなかつたようで、次の話はおそらく妻がおくさんから聞いたものであろう。

朝日新聞かに、佐藤春夫かが、魯迅のことを書いて、そのなかで藤野先生は既になくなられていると言つた。福井中学の国語教師かが、先生の長男の担任をしたことがあり、藤野巖九郎という特徴のある姓名から気がついて、元仙台医専教授であつたことを確かめ、朝日の記者に知らせた。佐藤春夫はそれを聞いて訂正と謝罪の文を朝日にのせた。

記者が先生の生存を確かめにお宅にうかがつた。先生の性格を知りぬいている奥さんはもちろんことわつたけれども、記者には抵抗しきれない。取次ぐと先生は、老来あまり破裂させなかつたかんしゃく玉が破れた。

「いつぞやの新聞でわしは死んでいるはずじゃ。死んだと言いなさい。死んだと言つて帰しなさい。ごめん、ごめん。」

(完)